

戦国武将、織田信長。天下統一という偉業を成し遂げた、日本人ならば誰もが知る偉大なる人物。この織田信長を「服飾」という角度から、また服飾を「織田信長」という視点から見て相互関係を考察した。資料として織田信長について書かれたものとしては最も史的価値が高いとされている『信長公記』を用いた。これは信長の側近であった太田和泉守牛一の書いたもので、実際は活字本『改定史籍集覧』をもとに服飾表現を拾い挙げた。

抜粋した服飾表現を「信長自身の服飾」「信長以外の人々の服飾」「贈答品として扱われた服飾」とに分類し、それぞれの項目においてどのような服飾がどのように使用、着用されていたかということを整理し、それらを踏まえた上で「信長と服飾」を考察した。

結果として、織田信長を「服飾」という観点からみた場合、信長にとっての服飾は「自己をアピールする為の」「表現としての服飾」と「褒美や答礼などの」「物としての服飾」との2つの機能に分けられる。信長にとって服飾は彼の「目立ちたい」「自分は周囲のものとは違う」といった気持ちを表現する格好の媒体であり、また彼の人間関係を円滑にする潤滑油としての役割もあった。

逆に服飾を「織田信長」という観点からみた場合、それまでの公家、都中心の社会構造から戦国時代の武士の勢力拡大への移り変わりを反映している。そこに信長の位置、立場を加味した上で服飾をみると、信長の服飾に対する好みが「織田信長」という人物であったからこそ周りの人々を感化させ、地味であった武士の服飾が派手好みへと変わる一因となり、次の桃山時代に花咲いた華やかな武士服飾への方向付けを成し得たと考える。